

幼稚園に入園するまで

T・Hの記録



これは、T・Hの家庭で、T・Hの幼稚園をきめて、入園試験をうけ、入園がきまるまでの状況を記録したものです。これから、T・Hがどのようにして幼稚園生活に適應してゆくか、月を追って記録を出してゆく予定です。幼稚園が、子どもの生活にとって、また、家庭にとって、どのようなはたらきをしているかをみていただきたいと思います。

△一、幼稚園をきめるまで▽

T雄は昭和三十一年五月五日生まれ、現在身長一〇七・六センチ
体重一九・〇kgのめったに病気をしない子どもである。幼稚園につ
いて話が具体的になって来たのは、T雄の四才の夏であった。
話題になった幼稚園は次の七つである。

	(通園方法)	(服装)	(宗教関係)
1 A	バスにのって五ツ目でスクールバスにのりかえ。	制服アリ	キリスト教
2 B	バスにのって五ツ目、大抵は近道を歩いて行く。	アリ	キリスト教
3 C	バスにのって三ツ目、大抵はある。	アリ	キリスト教
4 D	バスにのって三ツ目、大抵は歩く。	制服はないが紺色のスモック	仏教
5 E	電車にのり三ツ目で乗換、更に五ツ目バス四ツ目、大抵は近道を歩く。	制服アリ	宗教関係ナシ
6 F	バス四ツ目、大抵は近道を歩く。	アリ	宗教関係ナシ
7 G	バス十七分の(起点より終点まで)	制服ナシ	宗教関係ナシ

家から歩いて五分などというような近くには一つもない。近所で親しくしている方達は、A、B、C、Dそれぞれ一人ずつ行っている。

A 幼稚園について

母 「T雄ちゃん。あなたはどこの幼稚園に行きたいの。」

T雄 「Aだな。だってM子ちゃん(隣のお子さん)が行ってるんだもの。」

母 「あそこは規則書には男の子も入れると書いてあるそうだけど、女の子ばかりですって、男の子はいないそうよ。」

T雄 「じゃいやだ。」

B 幼稚園について

毎日、B幼稚園に行っているN子ちゃんが幼稚園から帰るのをまつて一しよに遊んでいる。

N子 「あたしは大天使ガブリエルよ。」

T雄 「僕は守護の天使。」

二人とも頭にいっぱい花をつけて、背中に二本ずつ葉らんをさしている。

N子「ねえ、ねえ、ガブリエル大天使、ガブリエル大天使。」

口を思いきり大きくうごかして『ガブリエル』と発音するのが快いらしく『ガブリエル、ガブリエル』といいながらかけて行く。

とても明るい日ざし。

M子のお母さんに逢った。

M子の母「この頃M子は、寝る前にお祈りするようになったのよ。それがとても利くの。前とちがって来たわよ。」

(このお母さんは、子どもと一しょにお祈りをした事があるのだろうか。感謝とか、よろこびをはなれたお祈りなのだろうか。)

父も、母も教会に行かなくても、せめて子どもはキリストの愛によつてしつけをもらおう、やさしい心を育ててもらおうという親心らしい。その親心は立派だが、ともするとしつけてもらうことだけがすべてと思ひこむ。これではキリストの教が単にしつけへの道具となつてしまふではないか。

友人「キリスト教関係の幼稚園も女の子ならいいけど、男の子は可哀そう。」

こういうことばがしばしばきかれるのは、かみくずが落ちてれば拾うとか、花を折らないとかいう目先のしつけがゆきとどいて、男の子の行動に禁止が多いという、うわさからである。

真に宗教的環境で、宗教的情操を育ててくれるのだったら、女の子も男の子もないと思う。そこには愛がみちみちて本当の自由があり、しつけがなされていると思う。「いけません。」といわれなくて

も、紙くずは紙くずかごにごく自然にすてられるだろうし、女の子も男の子もびのびとしてゐるはずである。

T雄も素直な幼児期をそういう雰囲気育てたいとは思ふが、宗教に徹した幼稚園ほど、宗教の本質にふれるような会話が出てくると思う。そうした時に、同じ信仰をもっていない母親は事をどう処理したらいいのだろうか。

知人「この間B幼稚園の母の会で遠足に行くお支度の話があったので『当日雨が降ったらどうしましょう』とうかがったら『必らずお天気になります』っておっしゃるのよ。『でも、万一』という」と『イエスさまにお祈りしてあるから大丈夫』っておっしゃるの。帰って主人に話したら『バカ!』っていわれちゃった。」

父はバカ!! といつてしまえば事はすむかも知れないが、母はどうしたらいいのだろうか。それ以上に子どもはどう思うだろうか。

T雄も、N子ちゃんにきてきては、天国とか、神様とかかなり突っこんで質問をする。知識だけでは説明しきれない。母に信ずるものがないと、納得のいくようには話してやれない。そして最もよく語りかけるものは母親自身の祈っている姿だと思つている。

私は仏教をよりどころとしている。それなのにT雄をキリスト教関係の幼稚園に入れては頭の中が混乱してしまうだろう。

宗教的情操は今まで通り家庭で育てていこうと思う。そこでB幼稚園、C幼稚園については親からは、積極的に話しかけないことにした。

D 幼稚園について

お寺が幼稚園をやっているというだけで、宗教的雰囲気はなさそうである。女の子が、

「あの人形とって来てみな。」

「ホラーコやる。」

「早くしなよ。」

などということばづかいをきいてみると、もう少しことばに注意してくれる——というよりむしろ、ことばづかに注意している家庭の子どもの集まっているといった方がいいか——幼稚園に入りたいと思う。

アソバセことばは感心しないが、先生も標準語を使ってくださいとありがたい。

E 幼稚園について

父の会社の上役の方のすすめだったが、通園が困難なのでお断りした。

F 幼稚園について

M子の母「M子の行っているA幼稚園はマダムというシャツとした方がいらっしてその下に生徒という感じだけど、F幼稚園は先生と子どもたちがお友達という感じ、『みんないらっしやい』なんどとても気さくだったわよ。」

歩いても行けるので時々垣根の外まで連れて行って中を見せた。

母「どう、この幼稚園と、前にお母さんといったG幼稚園とどっ

ちがいい？」

T雄「こっちは毎日歩いてくるんでしょ。」

幼稚園をきめるまで

—— K の場合 ——

「Kちゃんいくつ」

「四つ」

「じゃあもう幼稚園にいつているの」

「まだ。来年から」

こんな会話がたびたびされるようになると、Kは、「いくつ」とたずねられただけで、「四つだけど、幼稚園にはまだいってないの」と答えるようになった。その答には、「もう幼稚園にいつているみたいに大きいでしょう」という気持と、「本当はもう幼稚園にいきたいのだけれど」という気持がふくまれているように思われた。親もそろそろこの幼稚園に入園させるかをはっきりときめなければならなくなってきた。

まず、父の知っている付属の幼稚園は、その内容が立派であり、また、子どもたちのレベルも高いもので、入園出来る出来ないは別として第一に話題となった。しかし、運動会を見学に来たKを連れていったところ、四十五分以上かかり、Kは、「さで一休みしましょうか」といつて幼稚園でごろりと横になってしまった。これを見るにつけ、また日頃、地域社会に根を生やし、特別な扱いをしないという父の考えにも反するものとして、この園は、第一に話題に上り、第一に選択の

母 「そう、雨がふればバスにのってもいい。」

T雄 「じゃあ僕G幼稚園にする。毎日バスにのれるもの。」

G幼稚園について

T雄 「お母さん、G幼稚園にドングリの木ある？」

母 「エートあるでしょ。この間G幼稚園の先生が『遊園地に散歩に行つて落葉や、ドングリをひろいました。』って本にお書きになったのを読んだ事あるから。」

父 「T雄の幼稚園やっぱりG幼稚園にするか。」

母 「そうねえ」

父 「お母さんはG幼稚園の園長先生が前につとめておられた園で保育とはどういうものか、幼稚園とはこういうものだと教わつて来たんだから、あの幼稚園が一番いいだろう。」

母 「そうなの、それに同級生のKさん。卒業と同時にあの幼稚園におつとめになったのよ。同級生の方が先生だと便利だなんて色々な考えじゃないわ。むしろ子どもがいる前ではことばづかいから気をつけて行かなくてはならないと思つていろいろいいよ。Kさんは学生時代から学究的で真面目な方だからいいかげんな保育をなさるはずがないし。」

あの園長先生とKさんじゃないK先生。T雄を預けるのに安心だわ。」

父 「その安心は大切だよ。」

母 「ただバスで通うのがねえ。」

父 「少々遠くても歩いて通えるところを選ぶか、安心していられ

園外におかれた。従つて、近くの幼稚園のなかからえらぶということとなった。その方針で気をつけていると、母の耳にはいろいろな幼稚園のうわきが入ってきた。

「あそこは、強い子は伸びるけど、気の弱い子は下づみになつて伸びないですよ。」

「先生が熱心だけど、子どもの悪いところをきびしくおっしゃるから親がつらくて。」

「先生はやさしくてとてもいいけど、何となく活気がなくて、あんまり希望者が少ないですつて。」

「あそこは営利本位ですつて。」

こんなうわきが近くなだけに限りなく入つてきて、だんだん落ち着かなくなつてきた。人の単なるうわきに気をとられず、本当にKに適した幼稚園をえらばねばならないと気づいたのはぼつぼつ募集のはじまる頃だった。客観的に候補に上つた園を比較しようと次頁のような表を作つてみた。

この表の各項目に、よい、普通、困る、の三段階の評価を加えてみた。この結果、頭の中でごちゃごちゃと考えていたものがすつきりと形をととのえてきた。やはり、近くのX幼稚園とY幼稚園が得点が高く同点であった。私どもの家庭がキリスト教であり、その信仰にもとづいてKの教育をしていることを思い、最後にY幼稚園と決定した。実は、十二月にこのクリスマスの祝会を見学した帰り途に、既に母の心ではひそかにそう思つてはいたのであつたが。

る保育を選ぶか。」

母 「別にF幼稚園が安心していられないというわけではないわ。どうい先生方が、どういう保育をなさるのか知らないのよ。」

父 「フン。フン。」

母 「小さい子をバスで通わせる事が許されるなら、私はG幼稚園にしたいの。」

父 「じゃあG幼稚園にしよう。バスにのれるし、ドングリはあるというし、なあT雄。」

お母さんがバスに乗るところまで毎日送るといことにして、G幼稚園にきめた。

△二、入園のための試験日まで▽

一九六一・一・五

T雄 「幼稚園でお勉強するところだっね。N子ちゃんいってたよ。むずかしいお勉強するところだっサ。」

母 「そうかしら、遊ぶのよ。」

T雄 「遊ぶ？ 遊びに行くの？」

父 「そうだな、友だちと遊ぶところだな。一人で遊ぶんじやなくて、T雄ちゃんと同じくらいの大勢のお友達と一しょに遊ぶところだよ。」

一九六一・一・七

T雄 「ぼく幼稚園いっても折り紙なんか出来ないよ、いつもN子ちゃんに手伝ってもらわないとなんにも出来ないんだもの。」

表

Z 幼稚園		V 幼稚園		W 幼稚園	
歩いて4分。裏通りからゆける。	+1	都電・国電。都電で45分以上	-1	都電20分位	-1
仏教	-1	なし	0	キリスト教	+1
建物は普通。庭はあまり広くない	0	建物は立派。庭も立派	+1	建物は立派。庭は普通	+1
		社会的評価は高い。大学の付属で、小学校、中学校がついている。		すばらしい幼稚園 社会的評価は高い。女子の高校、中学、小学校がついているので女子の方が優勢である。	
お使いの時わきを通して、のぞいてみる。親友が、ここに入園する。自動車のおくりむかえがあるので、憧れている。	+1	遠いので結びつきはない。一年以上前に運動会に行ったときごろりと横になってしまう。	0	いところが一人Wの小学部に行っている。もう一人のKは今年小学部に入った。Kはこれによって、Kのことがうらやましい。Kと三人で遊ぶと、Kはいつも仲間はずれにされると、喜んでついでに歩三幼稚園に入園すると、仲が親密になると思う。このことは勿論よいことであるが一方、身内のみのだけの遊びのグループを作り排他的になるのではないか人形形成上望ましくないし、発展性がない。	-1
○運動会の練習の時柵の外からそっとみせていただく。きっと運動会の間きわで、いそがしいだろうが、先生方が、こわいかおで、あちこちの子どもを叱って歩いていらっちゃった。母が、夕方いそがしい時叱るのと似ているけれど、あまりよいと思わない。	-1	○先生の存在が保育の中で表面に出ないがそれについて自然に、子ども達が動いている。子ども達の動きをうまくとらえて保育されている。すべてが理想的で子どものレベルも高い。	+1		
K「お寺の幼稚園いきたいな」 母「どうして」 K「あきよしちゃんと毎日あそべるもの」 K「(おくりむかえの白い自動車をみて)あれお寺の幼稚園のだよ。アッ止った。アッ、幼稚園の人が降りたよ」 いつまで立ち止って動かない。	+1		0	見学したことがない。 K「(お手伝いのおばさんに)よしちゃんWに入ったんだよ、すみちゃんもWなんだよ」と得意そうにいう。	0
	+1		+1		0

毎日遊んでいるお子さんが、T雄より二才上なので幼稚園で覚えて来た折紙をつくって遊ぶらしいのだが、T雄はまだ何も出来ないのです。つまらないらしい。

T雄 「幼稚園に行ったらオーバーはどうしたらいいの」

T雄 「幼稚園で紙芝居もしてくださいませんか。僕みたいんだ」

T雄 「もういくつねたら幼稚園のしけん？」

母 「一つ、あしたですよ」

T雄 「おやつは僕もって行くね」

(「試験におやつ持参のこと」と「お知らせ」に書いてあった。)

△三、試験 日▽

○朝

洋服をきかえさせてやりながら、

T雄 「試験で何をやるの」

母 「先生が一しょに遊んでくださるの。それでやってごらんなきいっていわれたら、その通りやるの、まねっこあそびみたいだね」

T雄 「フーン」

母 「何かおききになったらね、お隣りのおばちゃんとお話するよ。うに何でもお話ししていいのよ。オボ(犬の名前)のおばちゃんにいろんなことお話するでしょ。ああいうふう」

	X 幼稚園	評価	Y 幼稚園	評価
通園に危険はないか	歩いて12分。電車通りをわたる	0	バスで2つ目	-1
宗教は何か	なし	0	キリスト教	+1
庭や建物は	建物は普通、庭にしいの木がある	0	建物は普通、庭はあまり広くない	+0
在園児と(単なる聞き客観的な取り上げだけをしてみる)	先生方が非常に熱心で、子どもをよくみて下さる。しかし母親のやり方を批判されることがある。		先生方がやさしく、誰でも受け入れて下さる、X幼稚園のような熱心さはないが親切である。	
Kと各園との結びつき	いとこが在園中で、運動会の際に招待され、ごほうびをいただきたい。	+1	日曜学校へ行っているので、2,3人の友人がある。先生方も親しい。	+1
見学してみた	先生方が飾り気がなく、いわゆる幼稚園らしいやさしさがなくかえってさっぱりして気持がよい。先生方が、全員を指揮して、大きな声であと片付けをさせるのがちょっと気になる。Kには必要なことと思う。展覧会は、一人ひとりの子どもにたくさんの記録があり、いかによく観察されているかわかる。	+1	○クリスマスの時参観させていた。全園児が50人位で、輪を作り、その中で、3,4人ずつ立って、普段やっているおゆうぎをしたり、合奏をしたり、とても家庭的、何よりも人に見せるための無理がなく、好感ももてる。	+1
Kの感想 (11月頃自発的に言ったことば)	K「X幼稚園はいいな」 母「どうして」 K「よしちゃんがいるもの」 (いとこ) 母「でもKちゃんが入るころは、卒業しちゃうのよ」 K「X幼稚園は、しいのきがあるからぼくすき」 母「そうねえ」	+1	K「Y幼稚園いいね」 母「そうねえ」 K「だって日曜学校でカードくれるもの」	+1
総合点		+3		+3

Kは、入園試験も受けないうちから、「ぼく、Y幼稚園いくんだよ」とたのしみにしている。

(母親F)

よい——+—
普通—— 0
困る——-1

ハンカチをポケットに入れてやると急に大きな声で、

T雄 「三丁目三十四番地の九！ あっいえたいえた。ふしぎだなあ、今までいえなかったのにいえた。」

(近所の方にしげんの問題には番地をきかれると教えられて来たらしい。最近番地が改正になったのでスラストラといえず、内心気にしていたのだろう。)

ちょうど、T雄の妹が風邪で寝ているため、母はつきそって行かない。

ミカンとクッキーズの入ったバスケットを下げて、父と一しょに出かけて行つた。

(試験場のようすは、父親の記録による。)

○試験場で。

試験場の控室に講堂があてがわれた。三か所にいろいろな絵本が置いてあつた。

T雄 「お父さん、ぼく本みる。えーとこれがいいよ。」

乗りものの絵本を取り出す。父はすこし離れたストープの側でみている。

T雄 「お父さん『きんば、きんば』ってなに。」

ケーブルカーの絵を指してきく。

父 「それは『ば』かな。T雄の一番よく知っている字じゃないかな。」

T雄 「あつ、『ば』だね。『きんば、きんば』ってなに。」

父 「そのケーブルカーの名まえさ。」

(父は金波、銀波の説明は抽象的であり、またT雄は金波銀波というふうにならわしい情景を経験したこともないので、このように答えた。T雄は次の絵がおもしろいらしくこの答えでなっとくした。)

T雄 「お父さん、おしっこ。」

父は一しょに便所へ行く。ちょうど一人の子が母親に手伝ってもらっている。

T雄 「ぼくは一人でできるんだ。」

控室にもどると、ちょうど女子学生が受験者の番号をよびに来た。

T雄 「お父さん、ぼくの番、まだ。」

父 「T雄はなん番だ。」

T雄の胸に番号がついている。

T雄 「三九^{えんじゅう}ばん」

父 「三十九番というんだよ。まだだから本をみておいで。番がきたらおしえてあげるから。」

父がストープの側にいるので、T雄もやってきた。運動場をみて、

T雄 「いろんなものがあるね。ぼくここにきたかったんだ。」

父 「まだ試験はすんでいないんだから T雄が入れるかわからないだよ。いっしょうけんめいやれば入れて、毎日ここで遊べるね。」

女子学生がよびに来た。T雄もその中に入っていた。

父 「さあ、T雄、番だよ。しっかりやるんだぞ。」

T雄 「うん。」

教室の前で父はもう一度いう。

父 「今朝おかあさんが『オボ（犬の名前）のおばさんとお話する
ような気持ちで話してたね。ふつうの気持ちになっているんだよ。』

第一室

T雄は笑って教室に入ってしまった。戸をしめられている中で
の話はわからないが、グループでジャンケンをする。時々こちらを
向いて笑って手をあげて合図をする。父は気楽にさせる意味で合図
にこたえる。かごにボールを入れるゲームをしてT雄は一個うまく
入った。得意そうにこちらを見て合図をした。父は、あまりT雄に
父を意識させてはいけないと思ひ、T雄に背中を向けて運動場を見
た。

第二室

T雄は男の子、女の子といすにこしかけてテストを待っている三
人でさかんに話をしている。ポケットからハンカチを二枚出して何
かいている。T雄と男の子がよばれて先生の前にすわる。二人の
子の間にはボール紙で小さなついたてがしてある。座ってから、
二人でちょっとふざけていた。しかし先生が積木でサンプルを作り
はじめると、T雄はじつと先生の手もとを注目した。

（そのじいっと見ている目は、いままで家庭では見かけたことのない
真剣さをもっていた。）

二度目を作った時、自分ができる隣の子に話しかけている。

第三室

第三室では絵をかかされた。隣の子はすぐ描きはじめる。T雄は
何を描こうかとまよっているふうであった。時々父の方を見て照れ
たような笑顔ををする。グリーンのクレヨンを手にもって、父の方へ
「これでいい」というような顔をした。父は何でも好きに描けばい
いんだ、という気持ちでうなずいてみせた。（あとは背中を向けて、
運動場をみる。）

やがてT雄は出てきた。

父 「ごくろうさん。元気にできたようだね。」

T雄 「ぼく絵がかけないんだよ。」

（父はこのことには答えなかった。）

父 「さあ、こんどは先生とお話をするんだ。」

T雄 「お父さん、ぼく遊んできていい。」

面接室の前にはたくさん並んでいるので、待ちくたびれたT雄が
きいた。

父 「もうすぐだから、待っていなさい。」

T雄はだんだん落着かなくなり、柱にぶらさがって、ぐるぐるまわ
りだした。（父は遊ばせて気持をスカッとさせた方がよいと思った。）
父 「T雄、じゃあすべり台で遊んどいで。よんだらすぐくるんだ
よ。」

T雄 「うん！」

Ｔ雄はすべり台ですべて帰って来た。

父 「もういいの。」

Ｔ雄 「また、あとでする。」

この時、女子学生が身体検査の室へつれていった。

Ｔ雄 「お父さん注射するの。」

父 「注射はしないよ。ほら、どこにも注射器がないだろう。」

奥で口腔検査をしている医者を指しながらＴ雄は気の弱い顔をしていった。

Ｔ雄 「ぼく、あれをするとはいちゃうの。あれ、きらいなんだ。」

父 「だいじょうぶさ。平気でアーンと口をあけていれば、はかないよ。のどに力を入れていらないんだよ。」

Ｔ雄は服をぬいで身長、体重を計ってもらい、例の口腔検査を待つために並んだ。さっきいっしょにテストを受けた男の子と、また

いっしょになった。

男の子 「お母さん、注射するの。」

男の子は不安そうに母親に甘えた。

母親 「いいえ、注射なんかしませんよ。」

男の子は、まだ安心しない。

Ｔ雄の父 「ほんとうに注射はしないよ。口の中を見てるだけだよ。」

Ｔ雄 「そうだよ注射なんかしないよ。注射なんか、したって痛くないよ。ぼく、はじめちょっと痛いけど、目をつぶっていると痛くないんだ。ねえお父さん。」

（Ｔ雄は、やはり注射に対する不安があるために、その不安を打ち

けそうとして、さかんに注射をしないこと、注射を受ける時どうすれば痛くないかを説明した。男の子は、つられて聞いていたが、Ｔ雄が注射々々というのでまた不安になってきたらしい。）

男の子 「いやだよ。」

Ｔ雄の父 「Ｔ雄、そんなに注射々々っていうと、こわくなるからやめなさい。」

まわりの人が笑ったのでＴ雄もバツ悪そうにやめた。それから、一生懸命、口腔をしらべる医師の方を見ている。列が進んで前へ出る時、小きぎみにバツと進む。緊張をしている感じがよくわかる。やがて、Ｔ雄の番となった。Ｔ雄は助手の先生から「いいからだをしていきますね。」と気持をほぐすことばをかけられたので、照れた顔をした。不安でワーツといたいところかも知れない。緊張しながらも威勢よくこしかけた。

Ｔ雄 「あーん」

医師がなにもしないうちから勢よく口をあけた。顔が赤くなり泣き笑いのような顔である。（Ｔ雄は緊張が続くとよくこんな顔をする。親が甘いことばをかけると泣くことがある。励ますと逆に笑い出す、そういう時の顔であった。）

医師 「そんなに緊張しなくていいだよ。」

（Ｔ雄があまり突拍子なく威勢がよかったので医師は笑いながらいった。まわりの人も笑った。Ｔ雄は、すぐすんだのでホツとした表情にもどった。）

Ｔ雄 「お父さん、へいきだったよ。」

父 「よかったね。痛くなかったろ。」

T雄 「うん。へいきだよ。」

また面接室の前にならんた。

T雄 「お父さん、ぼくあの貝がらみたいなので遊んできていい。」

運動場の左隅にある抽象形態を組み合わせたような遊び道具を指していった。父は、緊張をほぐすために許した。

T雄は、一つの階段を上ったが、上が球状になっていて、うまくまわって上に出れない。いろいろためしていたが、一度おりて裏がわからあがりはじめた。しかし、やはり同じ場所ですべてくふうしていたが、うまくいけない様子だった。あきらめて下において父のところへかけてきた。

父 「どうだった。あそべたかい。」

T雄 「ぼく、あの遊びかたわからないんだ。こんど、ブランコやってきていい。」

父 「もうすぐだから、よんだらすぐくるんだよ。」

T雄は、ブランコとすべり台で満足して遊んでいたが、順番が来たのでよんだ。

父 「さあ、これがすむと、もうおしまいだ。しっかりやるんだよ。」

T雄 「ちゃんとやるからガム買ってよ。」

父 「そんないい方、お父さんはいやだな。何か買ってもらえるならちゃんとする、もらえないならしない、というのはよくないことだよ。T雄はこの幼稚園に入りたいから試験を受けに来たんだろ。それだったら、一生懸命試験を受けなきゃ入れないじゃ

ないか。」

T雄 「ハイ。」

(T雄は打算的な気持でいったのではなく、気持のはずみでいったのだから、こういうことばでも見のがしておく、習性化してくる恐れがあるので、こんな場合注意することになっている。)

先生 「T雄ちゃんは、今日お父さんと来たのね。」

T雄 「お父さんがようじででられないから。」

先生 「そう。朝なにのって来ましたか。」

T雄 「タクシー。」

先生 「それはよかったわね。T雄ちゃんは妹さんがいますね。なんというお名前。」

T雄 「○○○とみ子といいます。」(この返事だけ、いわゆる面接の応答口調で答える。)

先生 「T雄ちゃんは、とみ子ちゃんを遊んであげますか。」

T雄 「とみ子、かぜをひいてるでしょう。だから外に行けないから遊んであげるけど、時々いじわるしちゃうんだ。」

先生 「それはよくないお兄さんね。T雄ちゃんはおもちゃをもってきますか。」

T雄 「自動車のおもちゃがあるんだけどもうみんなこわれているの。」

先生 「一生懸命遊んだからでしょ。ハイ、こっちへいらっしゃい。」

胸の番号札の下に、先生からチェックをもらって、室から出た。

父 「さあ、これでもうみんなすんだよ。よかったね。」

(婦りの用意をして外に出た。)

父 「T雄、つかれたかい。」

T雄 「へいきだよ。だけど、ぼく、はいれるかしら。」

父 「だいじょうぶさ。」

バスを待つて乗る。

父 「T雄、幼稚園に入ったら、毎日バスに乗って通うんだけど、

一人で乗れるかな。」

T雄 「多摩川園前からは、一つしかないでしょう。だからわかるけ

ど、かえりはバスがたくさんあるからわからないね。」(実際には

二つ三つ出ている)

父 「じゃあ、先生にらせていただく?。」

(しばらく考えて)

T雄 「アッ、こうすればいいよ。お父さんが多摩川園前って字を紙

に書いてくれたら、それを見て同じ字のバスに乗ればいいでし

よ。お父さん書いてよ。」

父 「そうだね。じゃあ、書いてあげようね。だけど、車掌さんに

もよく聞くんだよ。」

バスが走っている間、T雄は運転手の動作に見とれていた。T雄

はバスで通うのが楽しみらしい。多摩川園について。

父 「T雄、このふみきりがチンチンと鳴っているときは、どん

なことがあっても待つているんだよ。鳴らなくなったら、渡って

T雄 「急に渡ると電車にはねられるもんね。」

父 「さっき、絵を描くときなかなか描けなかったね。あとで何を

描いたの。」

T雄 「時計かいたの。だけどよく描けなかったんだ。なにを描いて

いいか、わからないんだもん。」

父 「そう。何でも好きなものを描けばいいんだけどな。こんどお

父さんがスケッチに行くとき、つれて行ってあげようね。いっし

よに描こうよ。」

T雄 「わー、うれしいな。」

父 「積木のとき、隣の子と話してたろ。お話しちゃいけないんだ

ぞ。」

T雄 「隣の子ができないから教えてやったんだよ。ぼくがいても

へんなことしてたよ。」

父 「先生がちがう問題をだしたんだよ。きつと。」

父 「チューインガムを買ってあげるよ。こっちの道を行こう。」

T雄 「わー、うれしいな。奥田さんのところに売ってるよ。とみ子

に見せるとほしがるから、ぼくそつと持つてるよ。」

父 「とみ子は、病気だからね。」

T雄 「とみ子は、のんじゃうといけないからね。」

T雄は坂道をのぼって、家が見えると「お母さんに話してあげよ

う。」といっかけてきた。

(試験も、比較的楽な気持で受けられたと考える。)

○試験から帰って

母 「どうだった。」

T雄 「試験おもしろかったよ。キシヤポッポやったんだ。ジャンケンで運転手と車掌ときめたの。」

母 「T雄ちゃんは。」

T雄 「車掌！」

母 「T雄ちゃんのお友達いっぱいいたでしょ。」

T雄 「ウン。お母さんが一しょじゃないって泣いてた子いたよ。」
(あんまりしつこくきいてもいけないと思つて私からはきかなかった。お食事の時などに少しづつ思い出しては話していった。)

○試験結果発表の前夜

T雄 「幼稚園に入れるかな。」

T雄 「どうして入れたか入れないかわかるの。」

母 「『この幼稚園に入ってもいい人の名前』、って紙に書いてはつてあるんじゃないかしら、お母さんの小さい時そうだったわ。」

T雄 「名前が書いてなかったらどうするの。」

母 「その人はおっこっちゃったのよ。」

(内心しまつたと思つたがもうおそい)

T雄 「おっこちるって……、上から？」

母 「その幼稚園へは入れないということ。」

T雄 「ぼくの名前出てるかなあー。」

新入園児を迎えるにあたって

幼稚園へはいることにきまつてから四月の入園式まで、子どもたちにとっては幼いながら期待や不安さまざまな想いにみだされる日であろう。親のなかには子どもに何かさせておかなければならないような気がして落ちつけない親もいるかも知れない。幼稚園でも先生たちは今度はいってくるのはどんな子どもたちだろうか、どんなことをしておいたら子どもたちが楽しく毎日をすごしてくれるだろうかといろいろ考えていることであろう。はいってくる子どもたちとその親、うけいれる幼稚園と先生たち、どちらにも準備が必要である。ここでは幼稚園として新しい子どもたちを迎えるについてどのようなことを考えておくか気づいた点を二、三あげておきたいと思う。

(1) 新入園児保護者会
幼稚園としては、子どもたちが幼稚園生活の規則正しさに早くなれるよう、家庭でもおきる時間ねる時間に注意するとか、自分でできることは自分でさせるなど入園前の準備として考えてほしいと思う。まとまつた形のある絵をかけるようになつてほしいとか、自分の名前をかけるようになってほしいなどとは決して要求しないし、また、幼稚園でおりこうにしていくように、家で子どもにもいい聞かせてほしいなども思わない。生地のままでもいい。幼稚園に来てみて、「いいなあ」と子どももころに感激をもつて新しい生活にどけこんでくれることを願っている。幼稚園のうけいれ準備と家庭での準備とがくい違つて、子どもが失望したり、ひどく緊張したりするようなことになつてはかわいそうである。幼稚園とはどんなところか、を親に知つてもらうために、新入園児保護者会を計画している。それは幼稚園の教育方針というような大きなこととはもちろん、毎日の生活がどのようであるか、また持ち物やその他こまかいことも含めて親に知ってもらい、保護者心得などよく目を通して、

○試験合格の夜

T雄 「いつから幼稚園行くの。」

母 「四月から。」

T雄 「四月っていつ。」

母 「そうね、たくさん寝てから。」

T雄 「五つくらいねたら？」

母 「もっとたくさんよ。」

T雄 「だって受かったんでしょ。」

母 「そうよ、でもまだまだ。」

○翌朝

T雄 「オボ(犬の名前)のおばちやま、ぼく幼稚園うかったよ。」

隣の人 「そういいわね。」

T雄 (母に) 「お母さん、お母さん幼稚園いつから行くんだった。」

母 「四月から。」

T雄 (隣の人に) 「四月から行くの。」

○その後

一九六一・一・二二 遊びに来た叔父に

T雄 「ぼくね、幼稚園うかったよ。」

叔父 「何ていう幼稚園かい。」

T雄 「○○○○！バスに乗っていくんだよ。」

叔父 「バスどれにのるかわかるかい。」

T雄 「お父さんに行く先を紙に書いてもらうんだよ、それでその字

と同じバスにのればいいでしょ。」

幼稚園の生活についてじゅうぶんの理解をもってもらいたいと思っている。入園後も保育をたえずより効果的な形ですすめてゆく上には、家庭の協力がぜひとも必要であることを考え、新入園児保護者を意義あらしめたいと思う。

けが必要であろう。いろいろな材料からいろいろな遊びが生まれ発展してゆくことは、そのまま新しいグループの誕生と発展につながる。少しづつ使うことももちろん必要であるが、それは子どもたちが幼稚園生活に安定感をもつことができるようになってからである。

(3) 新入園児へのおくりものを考える。

入園したばかりの子どもたちはほとんど「遊び方」を知らない。はじめて大ぜいのなかにほり出されて、話し相手や遊び相手を探めながらいい知れぬ集団の圧力をうけとめているのが、せい一杯というのが大部分の子どものいつわらざる姿ではないだろうか。このような子どもたちの緊張をときほぐして、仲間とのふれ合いをより早くすすめることができるように、先生は遊ぶための材料や場をととのえてやらなければならぬ。材料に高価なものはいらない。一つの木片でも子どもが手にとればりっぱな汽車になり船になる。種類もできるだけ多くまたゆるたかでありたい。こんな物がある、あんな物がある、これを使って何をしようかなと子どもがみずから遊びを考え出すこともあろうが始めのうちはやはり先生の援助

入園式の日には年長の子どもたちが自分の作った、風ぐるまや手さげなどを新しくはいった子どもたちにくばっている様子はほんとうにほほえましく、またもらった子どものほうも幼稚園に親しみを感じてくれるようである。また、年長組が劇あそびやリズムあそびなどを新しくはいった子どもたちに見せてあげるのも一案である。年長組は大きくなったのだという自覚をあらたにするであらうし、新しくはいった子どもたちも、生き生きとした楽しかふんいきのなかで、自分がいかに生活の一端に接触することになるからである。

(東横学園三子幼稚園 河尻朋子)